

保育園・こども園・幼稚園向け 「これからの保育を考えるための園基礎調査」 結果報告書

2023.04.26

株式会社ベネッセコーポレーション
Kids & Familyカンパニー

2017年3月に保育所保育指針，幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時改定され、2018年から本格実施となりました。それから5年が経ち、それぞれの園で「子ども主体」の取り組みが進んでいます。

今回、（株）ベネッセコーポレーションでは、その現状を捉えるために、**日本全国の保育園・幼稚園・こども園と、0歳以上の未就園児を持つ保護者向けの調査**を実施いたしました。調査に際しては、全国からランダムに抽出した園に加え、弊社メールマガジン登録園、ICTシステムの「コドモン」を利用している園、合計約2万園に、郵送・メール・FAXにて協力依頼を行いました。（※1）

また、本調査においては、園における保育の実態をより全体的に捉えることができるように、玉川大学の大豆生田啓友先生・岩田恵子先生に調査設計から分析まで、全体を通してご意見をいただきながら進めてまいりました。

今回の園調査では、子どもと保育者の雰囲気といった園の様子や、記録や子どもとのかかわり方などの保育活動の実態について、行動ベースでの質問を中心に回答をいただき、「子ども主体」に関する園の捉え方・取り組みの状況を分類するために、クラスター分析を行いました。また、この分析経過で見えた「特徴的な因子」から、「子ども主体」を実現するためには、**「園の教育方針」**に加えて、**「計画の柔軟性」**、**「記録」**、**「保育者の様子」**が重要であることが明らかになりました。

この調査結果報告書では、主に園調査の分析結果から見えてきたことを中心に、各園における「子ども主体」の状況をご報告させていただきます。（※2）

（※1）株式会社コドモンは、弊社と共同事業を行うパートナーです。今回の調査にも、利用園への調査協力依頼という形でご協力をいただきました。

（※2）より詳しい調査結果が知りたいという園、企業、自治体の担当者の方に向けては、調査結果詳細をお伝えするセミナーを開催する予定です。

【園調査】

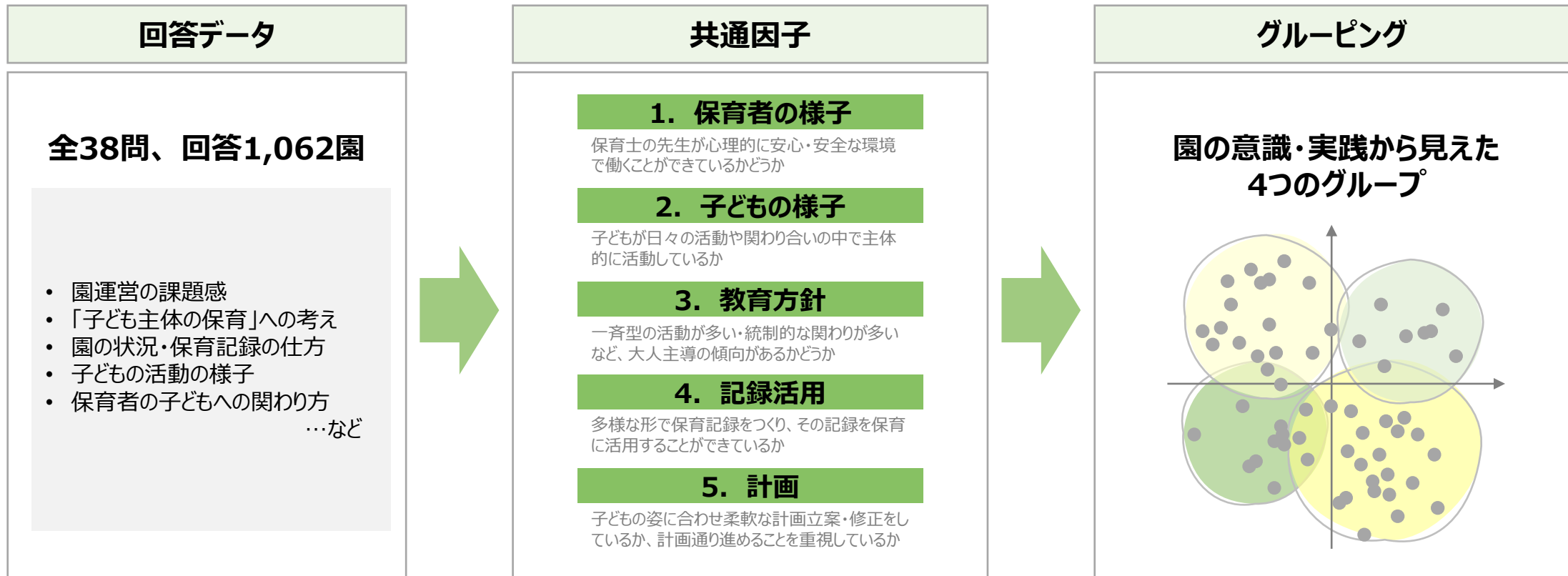
- 調査テーマ：これからの保育を考えるための園基礎調査
- 調査方法：WEB調査法
- 主な調査項目 全38問
 - ・ 「子ども主体の保育」についての考え・課題感
 - ・ 保育計画・保育記録の作成・活用の仕方
 - ・ 子どもの活動の様子・保育者の子どもへの関わり方
 - ・ 園行事・ドキュメンテーション・サークルタイムについて
- 調査時期：2023年1月～2月
- 対象：保育園・幼稚園・こども園
- 回答園数：1062園
 - ※認可保育園：466園 認可外保育園：152園
 - 幼稚園：178園 認定こども園：266園

【保護者調査】

- 調査テーマ：園の選び方や教育観に関する調査
- 調査方法：WEB調査法
- 主な調査項目 全22問
 - ・ 園選びの際に重視すること
 - ・ 園で子どもに身につけてほしい力
 - ・ 子どもの教育で取り組んでいること
 - ・ 子どもへの関わり・自身の教育観
- 調査時期：2023年1月
- 対象：0歳児以上の未就園児を持つ保護者
- 回答者数：1030名

※保護者調査の結果は、園選びの基準についての園の捉え方との対比として、P.17にてご報告しています。

因子分析より、保育に対する意識や実践状況を伺った複数の回答に潜む「5つの共通因子」が抽出されました。更に、その5つの因子の類似性をもとに、園をマッピングした結果、ご報告の4つのグループが見えてきました。それぞれのグループは、5つの因子に対し「特徴的な類似性・相違性」を持ち合わせており、その類似性・相違性から、各クラスターの象限名を定義しています。



今回の分析結果から、園によって「子ども主体」の捉え方・取り組み方が大きく4つに分かれていることがわかりました。それぞれの傾向を分析し、各集団を以下のような名称で分類しました。各象限における因子の状況は次ページをご参照ください。

<p>“子ども主体”を尊重している園 (22.2%)</p>	<p>子どもへの関わりが応答的で、 一人ひとりの子どもの姿から柔軟に計画を見直している</p>
<p>集団としての自主性を尊重している園 (26.6%)</p>	<p>子どもの声を聴きながら、 事前に決めた活動に取り組むことを重視している</p>
<p>“子ども主体”に試行錯誤中の園 (30.6%)</p>	<p>子どもの姿を捉えた柔軟な保育を試みているが、 子どもへの統制的な関わりや一斉活動も多い</p>
<p>集団としての指導を重視している園 (20.6%)</p>	<p>子どもへの指導を重視しており、 予め決められた一斉型の活動が多い</p>

変化への柔軟性：高

22.2%

A “子ども主体”を尊重

1.保育者の様子	園内に一体感・安心感があり、先生同士が子どもの姿を語り合い、応答性の高い保育を連携して行っている
2.子どもの様子	子ども同士の豊かなかかわりの中で、 子どもが主体的に試行錯誤しながら、挑戦的な活動に取り組んでいる
3.教育方針	先生の統制的な関わりは少なく、先生が決めた一斉活動に取り組む傾向は低い
4.記録活用	記録の仕方や活用が多様で充実している 記録の保護者発信も積極的に実施
5.計画	計画の立案や変更が柔軟で子どもの「やりたい」を尊重

B 集団としての自主性を尊重

26.6%

1.保育者の様子	園内に一体感・安心感があり、先生同士が子どもの姿を語り合い、応答性の高い保育を連携して行っている
2.子どもの様子	子ども同士のかかわりもあり、挑戦的な活動を行っているが、 試行錯誤はやや少なく、先生に頼る面もある
3.教育方針	先生の統制的なかかわりが多く、先生が決めた一斉活動に取り組む傾向も高め
4.記録活用	記録の仕方や活用が多様で充実している 記録の保護者発信も積極的に実施
5.計画	計画通りに取り組む傾向が強く、計画の柔軟性は低め

子ども主体の状況

課題感のあるところ

子どもの姿が
ベース

30.6%

C “子ども主体”へ試行錯誤中

1.保育者の様子	園内の一体感が低めで、先生たちがのびのびと保育ができていない。子どもの姿を語り合うことも少ない
2.子どもの様子	子どもの同士の話し合いが少なめで、子どもの試行錯誤や挑戦的な活動も少なめ
3.教育方針	先生の統制的な関わりはやや少ないが、 先生が決めた一斉活動に取り組む傾向は高め
4.記録活用	記録の仕方や活用はあまり充実していない
5.計画	計画の立案や変更が比較的柔軟で、子どもの「やりたい」を尊重しようとしている

D 集団としての指導を重視

20.6%

1.保育者の様子	園内の一体感が低めで、先生たちがのびのびと保育ができていない。子どもの姿を語り合うことも少ない
2.子どもの様子	子どもの同士の話し合いも、子どもの試行錯誤や挑戦的な活動も少ない。先生に頼る傾向がやや強い
3.教育方針	先生の統制的な関わりが多く、先生が決めた一斉活動に取り組む傾向が強い
4.記録活用	記録の仕方や活用はあまり充実していない
5.計画	カリキュラムに応じた計画通りに取り組んでおり、計画の柔軟性はほとんどない

大人主導

変化への柔軟性：低

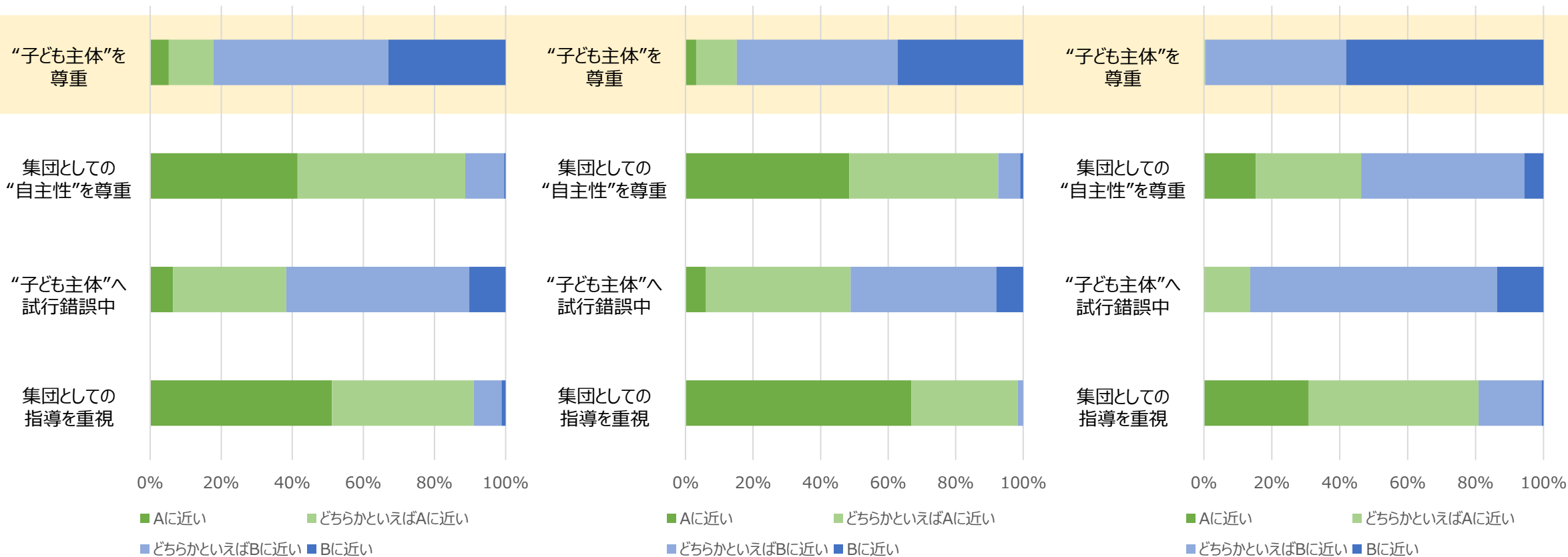
「子ども主体」を実現するための重要な要素：計画の柔軟性

“子ども主体”を尊重している園は、子どもの姿に合わせて**柔軟に計画を変更**していました。一日の中で子どもの興味関心やブームに合わせて柔軟に計画変更をするだけでなく、**日々の子どもの姿に合わせて週次・日次の計画を立案・見直している**様子がみられます。

- A) カリキュラムに基づいて前週に計画を立案し、週中には見直さない
B) 明確な計画を立てることはせず、毎日の保育の後に明日の保育や週案の見直しを行っている

- A) 週案に沿った形でカリキュラムに基づいて計画している
B) 毎日の子どもの興味関心やブームに合わせて計画している

- A) 計画にそって実施しており、基本は計画からの変更はしない
B) 毎日の子どもの興味関心やブームに合わせて、柔軟に計画の変更を行う



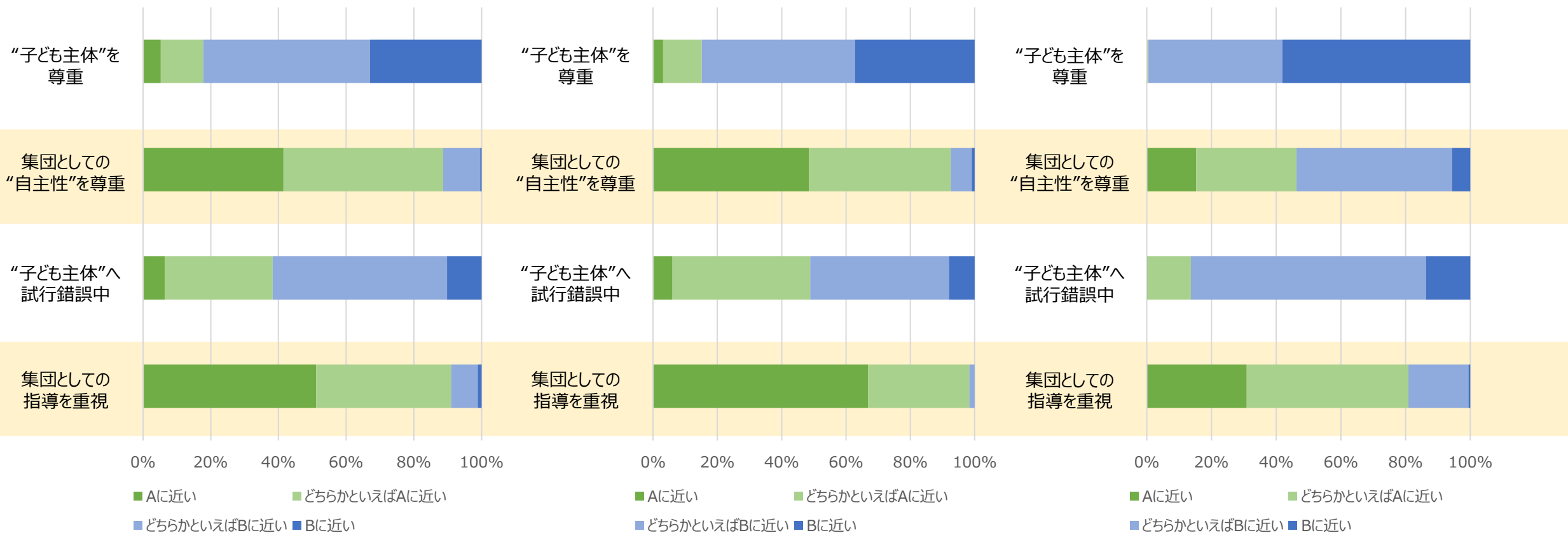
「子ども主体」を実現するための重要な要素：計画の柔軟性

一方で、あらかじめカリキュラムに基づいた活動計画を立て、その計画の通りに一日の活動を行うという園も多くありました。特に集団としての“自主性”や指導を尊重している園でその傾向が強いようです。「計画通りに進める」という意識が強く、計画を固定的なものとしてとらえている園も半数以上あるのではないかと考えられます。

- A) カリキュラムに基づいて前週に計画を立案し、週中には見直さない
B) 明確な計画を立てることはせず、毎日の保育の後に明日の保育や週案の見直しを行っている

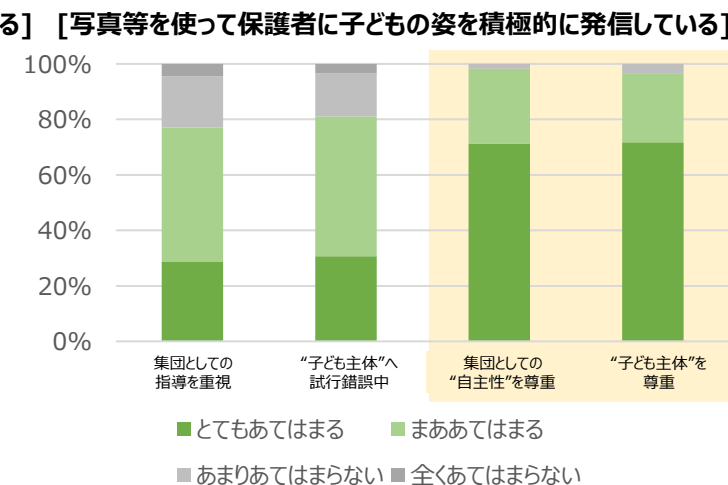
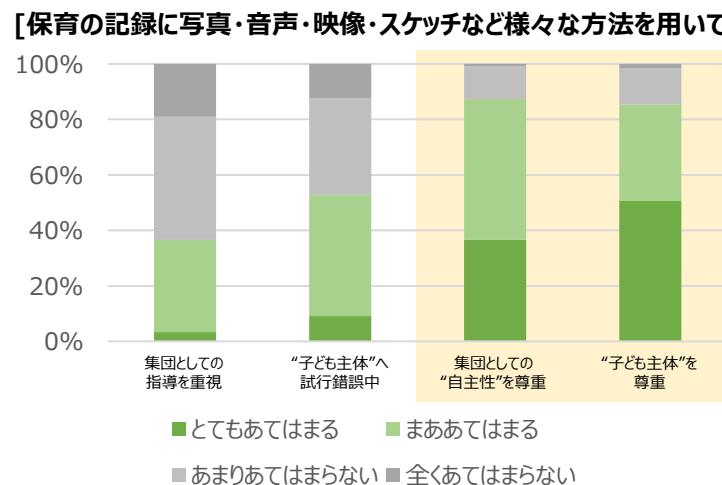
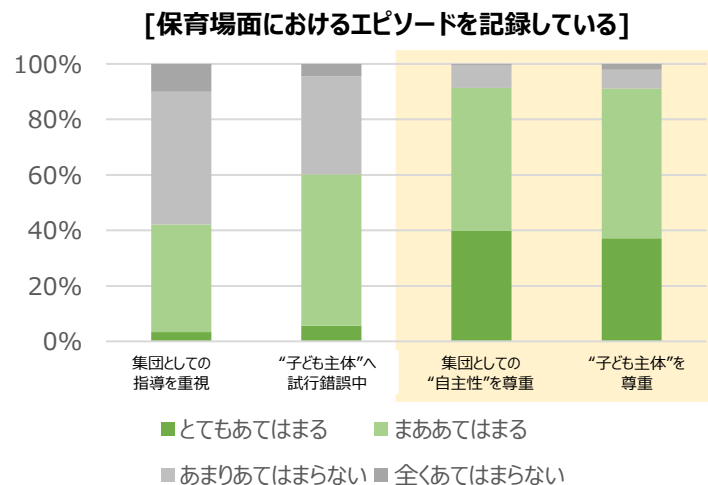
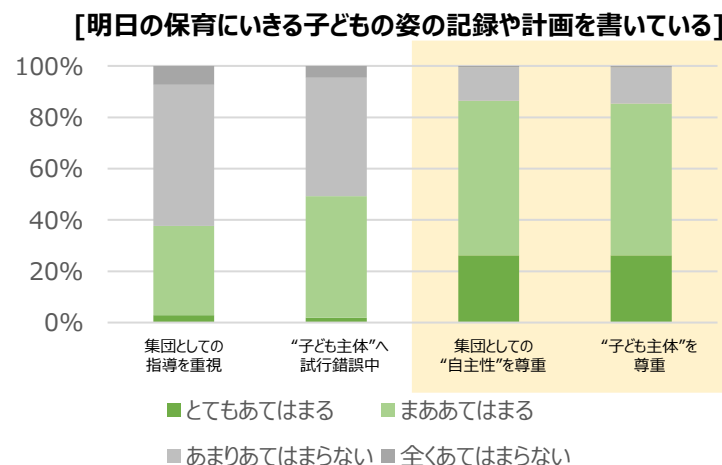
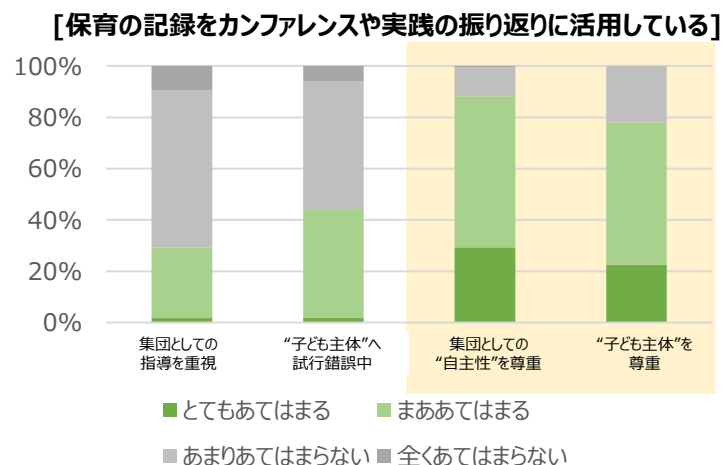
- A) 週案に沿った形でカリキュラムに基づいて計画している
B) 毎日の子どもの興味関心やブームに合わせて計画している

- A) 計画にそって実施しており、基本は計画からの変更はしない
B) 毎日の子どもの興味関心やブームに合わせて、柔軟に計画の変更を行う



「子ども主体」を実現するための重要な要素：記録について

“子ども主体”を尊重している園・集団としての“自主性”を尊重している園は、他の集団の園と比べて、記録の仕方・活用の充実がみられました。

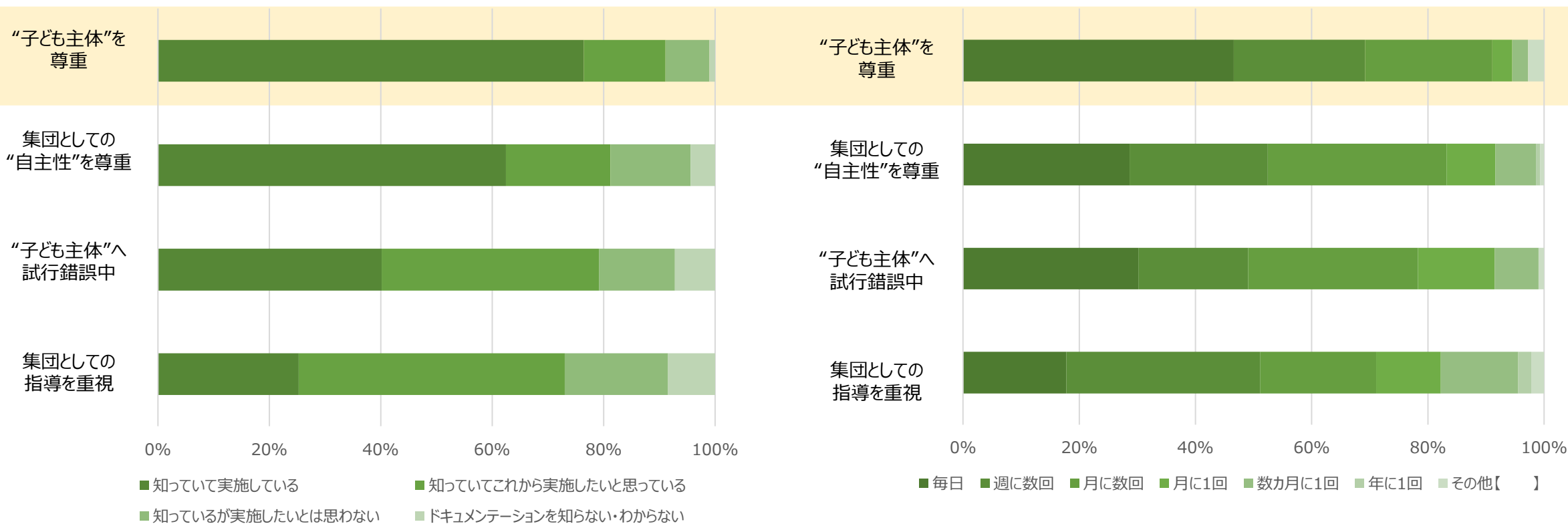


「子ども主体」を実現するための重要な要素：記録について

ドキュメンテーションの実施状況は、記録の仕方・活用の充実との関連性が見られます。“子ども主体”を尊重している園がドキュメンテーションを実施している割合が最も高く、実施頻度も最も高いという結果になりました。

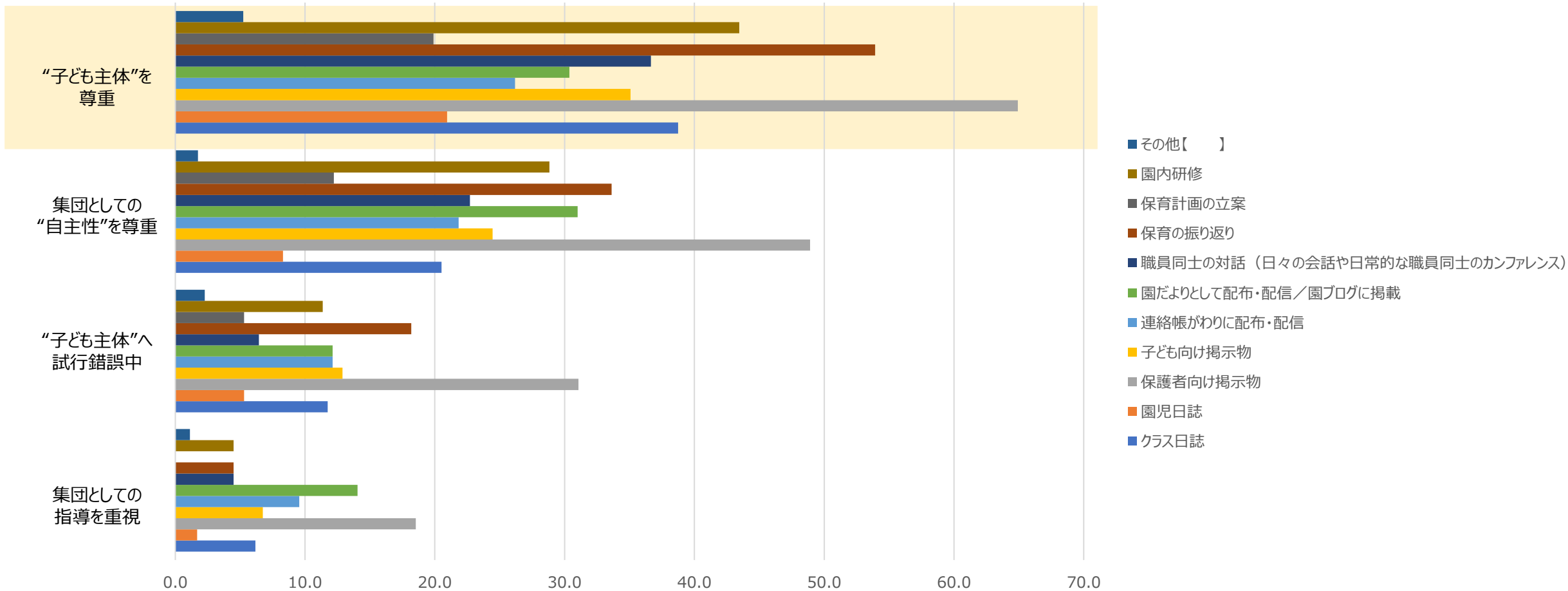
ドキュメンテーションの実施状況

ドキュメンテーションの実施頻度



また、“子ども主体”を尊重している園では、ドキュメンテーションの活用が多様な園が多いことも特徴です。「保護者向け掲示物」としての活用以外に、保育の振り返りや園内研修への活用、クラス日誌や子ども向け掲示物、職員同士の対話のツールとしてなど、多様な活用をしていることがわかりました。

ドキュメンテーションの活用用途



「子ども主体」を実現するための重要な要素：記録について

ドキュメンテーションを実施している園全体でみると、ドキュメンテーションの実施頻度が少ない園ほど、ドキュメンテーションに取り組む課題感として「人手不足・業務負荷」を挙げていることがわかります。一方で、**ドキュメンテーションを毎日実施している園は、「人手不足・業務負荷」の課題感が少なく、困っていることがないという園も多くなっています。**

ドキュメンテーションの実施頻度と ドキュメンテーション実施する上での課題		全体	人手不足・業務負荷	保育者に研修をする時間がない	保育者の育成が難しい	ドキュメンテーションに取り組んでみたいが、どう進めていかがわからない	その他【 】	困っていることはない
			(数)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
全体		(517)	230 44.5	135 26.1	127 24.6	19 3.7	79 15.3	115 22.2
Q24 園では、どのくらいの頻度でドキュメンテーションを実施していますか。最も近いものを選択してください。 ※クラスによって状況が異なる場合は、最も頻度が高いクラス	毎日	(179)	53 29.6	43 24.0	44 24.6	5 2.8	33 18.4	55 30.7
	週に数回	(119)	52 43.7	34 28.6	28 23.5	5 4.2	18 15.1	22 18.5
	月に数回	(132)	72 54.5	37 28.0	32 24.2	4 3.0	16 12.1	25 18.9
	月に1回	(40)	25 62.5	11 27.5	11 27.5	0 0.0	8 20.0	5 12.5
	数カ月に1回	(33)	21 63.6	9 27.3	11 33.3	4 12.1	1 3.0	5 15.2
	年に1回	(4)	3 75.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 25.0	0 0.0
	その他【 】	(10)	4 40.0	1 10.0	1 10.0	1 10.0	2 20.0	3 30.0

「子ども主体」を実現するための重要な要素：記録について

ドキュメンテーションを実施している園全体でみると、毎日ドキュメンテーションを実施している園のほうが、さまざまな用途にドキュメンテーションを活用していることがわかります。多様な用途でドキュメンテーションを活用することで、**これまで日常的に行っていた記録をドキュメンテーションに置き換える**など、複数業務の一元化や業務負荷の削減につながっていると考えられます。

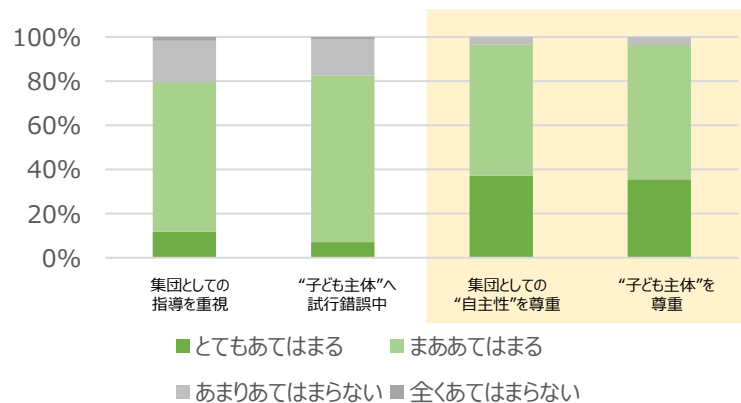
ドキュメンテーションの実施頻度とドキュメンテーションの活用用途

	全体	クラス日誌	園児日誌	保護者向け掲示物	子ども向け掲示物	連絡帳がわりに配布・配信	園だよりとして配布・配信／園ブログに掲載	職員同士の対話（日々の会話や日常的な職員同士のカンファレンス）	保育の振り返り	保育計画の立案	園内研修	その他【 】
全体	(517)	181 35.0	94 18.2	412 79.7	186 36.0	172 33.3	216 41.8	165 31.9	266 51.5	97 18.8	205 39.7	26 5.0
Q24 園では、どのくらいの頻度でドキュメンテーションを実施していますか。最も近いものを選択してください。※クラスによって状況が異なる場合は、最も頻度が高いクラス	毎日	(179) 109 60.9	54 30.2	138 77.1	56 31.3	100 55.9	63 35.2	67 37.4	113 63.1	60 33.5	73 40.8	5 2.8
週に数回	(119)	44 37.0	23 19.3	96 80.7	46 38.7	38 31.9	57 47.9	43 36.1	62 52.1	19 16.0	47 39.5	5 4.2
月に数回	(132)	20 15.2	14 10.6	107 81.1	54 40.9	22 16.7	61 46.2	38 28.8	60 45.5	14 10.6	55 41.7	10 7.6
月に1回	(40)	3 7.5	0 0.0	33 82.5	15 37.5	7 17.5	17 42.5	9 22.5	14 35.0	2 5.0	14 35.0	3 7.5
数カ月に1回	(33)	2 6.1	0 0.0	25 75.8	7 21.2	2 6.1	11 33.3	4 12.1	12 36.4	0 0.0	13 39.4	1 3.0
年に1回	(4)	1 25.0	1 25.0	4 100.0	2 50.0	1 25.0	2 50.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0
その他【 】	(10)	2 20.0	2 20.0	9 90.0	6 60.0	2 20.0	5 50.0	3 30.0	4 40.0	1 10.0	2 20.0	1 10.0

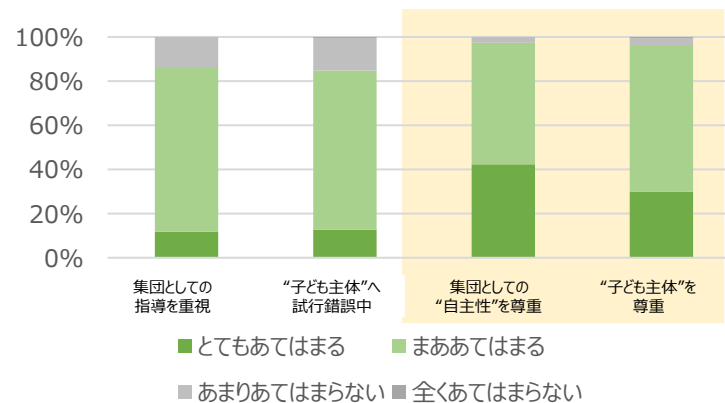
「子ども主体」を実現するための重要な要素：保育者の様子について

“子ども主体”を尊重している園・集団としての“自主性”を尊重している園は、**先生同士で子どもの姿を語り合い、安心できる雰囲気の中で、先生たちがのびのびと保育をしている**ようです。活動自体は大人が決めた「枠」の中であったとしても、先生同士の対話や連携があることで、子どもが自主的に活動に取り組むことができているのが後者の園と言えそうです。

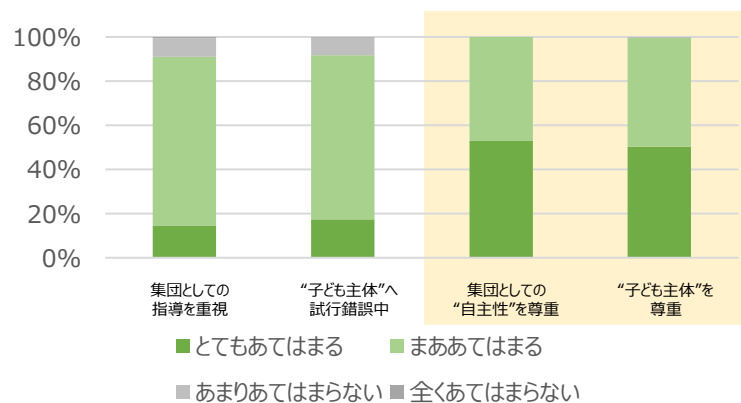
[園全体に一体感がある]



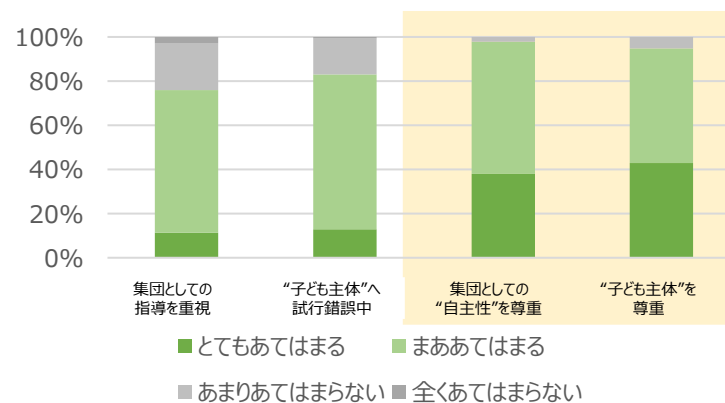
[先生同士の連携がとれている]



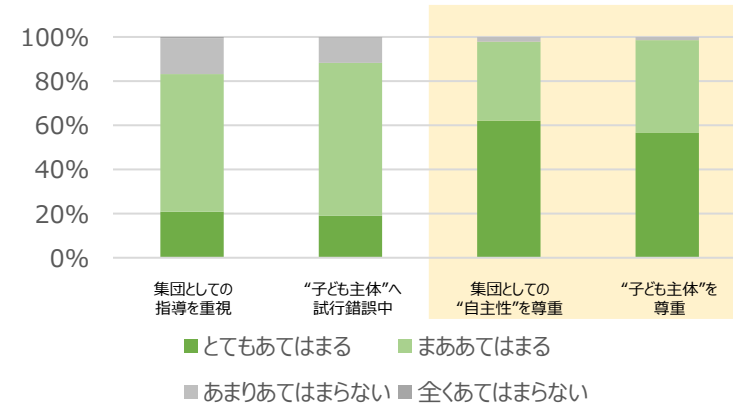
[安心できる雰囲気がある]



[先生たちがのびのびと保育をしている]



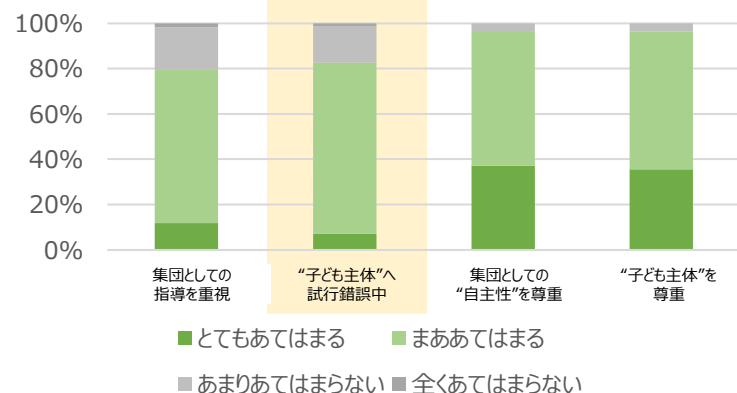
[先生同士が子どもの姿をよく語り合っている]



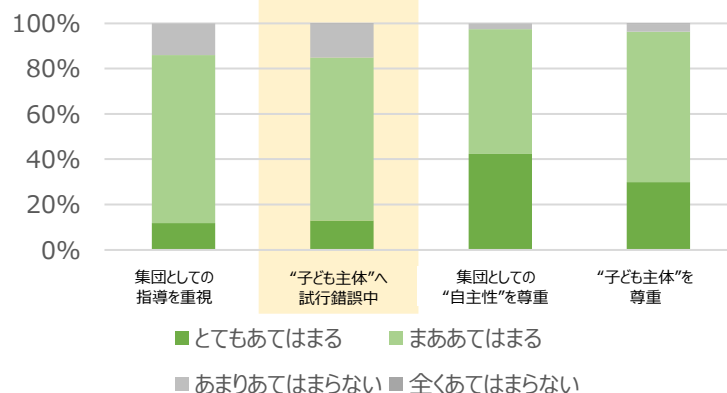
「子ども主体」を実現するための重要な要素：保育者の様子について

「子ども主体」に試行錯誤中の園は、先生同士の対話や連携が十分できていない様子が伺えました。記録を活用している園も少ないため、**記録を元に先生同士が対話することも少ない**のではないかと考えられます。これらの園では、子どもの声を聴こうとしてはいるものの、それがなかなか「子ども主体」につながっていないようです。

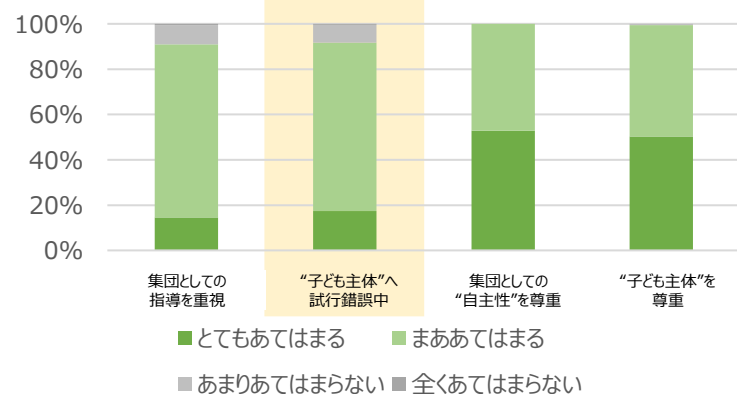
[園全体に一体感がある]



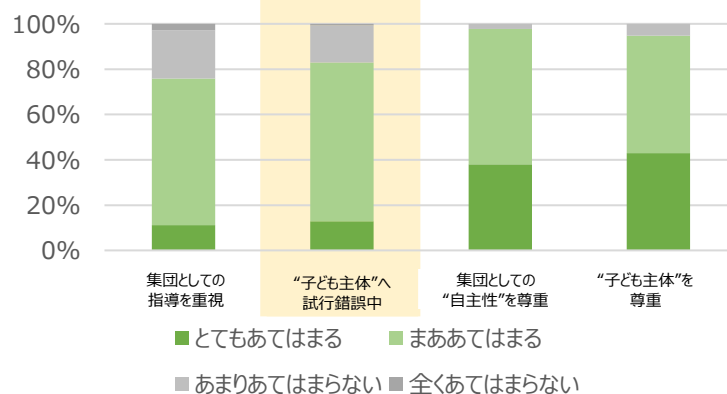
[先生同士の連携がとれている]



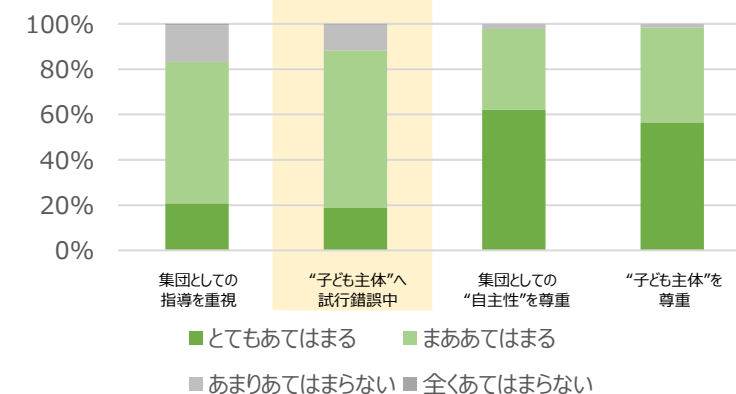
[安心できる雰囲気がある]



[先生たちがのびのびと保育をしている]



[先生同士が子どもの姿をよく語り合っている]



園の抱える課題感について

集団としての指導を重視している園は、**職員の採用**についての課題感が他園よりも高く、“子ども主体”に試行錯誤中の園は、**職員の離職**についての課題感が他園より高い傾向があります。また、集団としての“自主性”を尊重している園は、全体的意は課題感が少ないものの、「**発達課題のある園児の対応**」への課題感のみが他園より有意に高くなっています。

「子ども主体」への課題

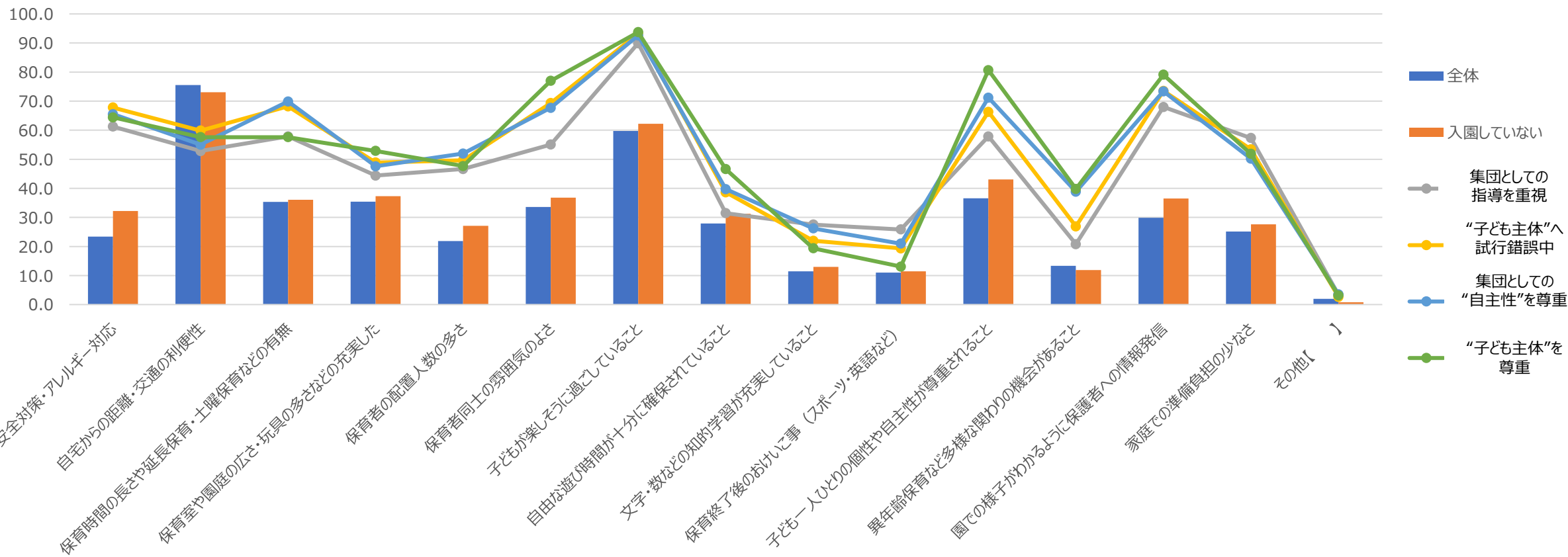
	全体	保育のやり方をどう変えていいのかわからないこと	これまでの保育を変えることに、不安や抵抗感があること	これまでの保育を変えることに、職員の同意を得られないこと	子どもの興味のあることだけやっけては、多様な経験ができないこと	子ども主体の保育について学ぶための時間がないこと	園内で子ども主体の保育のやり方を検討する十分な時間がないこと	外部研修や他園の見学などで知識を学んでも、それを園でどう実現すればいいかわからないこと	園長・管理職側が「子ども主体の保育」が何かかわかっていないこと	園長・管理職側が子どもの興味の見つけ方や、計画へのつなげ方がわからないこと	保育者が「子ども主体の保育」が何かかわかっていないこと	保育者が子どもの興味の見つけ方や、計画へのつなげ方がわからないこと	保育者の人手不足・業務負荷	保育者同士の関係性・同僚性	その他【 】	課題だと感じていることはない	無回答
全体	(1062)	15.5	17.1	13.4	20.7	24.7	44.9	19.6	3.2	7.2	22.1	36.9	46.1	22.7	9.3	2.1	12.9
cluster-1：集団としての指導を重視	(178)	20.2	28.7	16.9	22.5	30.9	54.5	23.0	4.5	10.1	32.0	40.4	42.7	21.3	5.1	1.1	12.4
cluster-2：“子ども主体”へ試行錯誤中	(264)	22.0	20.1	15.2	24.6	29.9	56.8	28.8	4.2	10.6	26.5	44.7	51.5	27.7	9.1	0.8	10.6
cluster-3：集団としての“自主性”を尊重	(229)	10.9	12.7	8.3	21.4	16.6	33.6	10.9	1.7	1.7	14.0	27.1	41.9	14.0	7.9	3.1	19.7
cluster-4：“子ども主体”を尊重	(191)	8.4	6.8	6.3	10.5	18.8	34.0	11.5	1.0	3.7	14.1	36.6	46.1	25.1	18.8	4.2	7.9

園運営の課題

	全体	園児確保	園の安全管理	園の保育の質	子どもの遊びや学びの機会	発達課題のある園児の対応	職員の採用	職員の離職	職員の業務負荷	保育者の同僚性	保育者の主体性	新人保育者の育成	中堅保育者の育成	管理職の育成	保護者コミュニケーション	保護者に喜ばれるサービスの提供	地域に開かれた保育園であること	その他【 】	特に課題はない
全体	(1062)	46.8	33.2	64.9	37.3	60.9	54.5	25.2	55.1	25.2	45.0	43.1	50.0	36.2	31.1	18.0	38.8	3.5	0.1
cluster-1：集団としての指導を重視	(178)	51.7	36.5	74.2	45.5	63.5	64.0	27.0	52.8	32.0	51.7	48.9	54.5	48.9	35.4	26.4	36.0	3.4	0.0
cluster-2：“子ども主体”へ試行錯誤中	(264)	42.4	36.7	73.1	40.5	64.8	54.9	31.1	62.5	29.5	56.1	49.6	54.9	40.5	31.4	15.9	45.8	3.0	0.0
cluster-3：集団としての“自主性”を尊重	(229)	46.3	30.1	59.0	27.5	70.3	55.5	19.7	61.1	17.0	30.1	39.7	45.4	26.2	31.9	16.2	32.3	4.4	0.0
cluster-4：“子ども主体”を尊重	(191)	42.9	30.4	60.2	39.3	56.5	52.9	24.1	53.9	29.8	45.5	37.7	47.6	35.1	30.4	11.0	47.1	4.7	0.0

入園前後の乳幼児の子の保護者へのアンケートの結果から、保護者の園選びの基準は「地の利」が最も大きいことがわかります。それ以外では、「子どもが楽しそうに過ごしていること」に次いで、「一人ひとりの個性や自主性の尊重」が重視されています。個性尊重・個別化という新しい時代を迎え、少子化も進んでいく中で、保護者の「子ども主体」へのニーズも高まっていると言えそうです。

園の考える「保護者の園選びで重視すること」と、実際の保護者の園選びで重視すること



調査結果からの考察

今回の調査結果について、大豆生田先生・岩田先生から考察いただきました。

「子ども主体」を実現するために 考えたいこと



玉川大学 教育学部 教授
大豆生田啓友先生



玉川大学 教育学部 教授
岩田恵子先生

今回の調査結果を踏まえて、いくつかわかったことがあります。

一つは「自主性」と「主体性」が混同されやすいことについてです。

「自主性」は、活動に子どもたちが自分から進んで参加するかどう
か、という視点です。「能動性」と言い換えてもいいかもしれませんが。
活動に参加すること=よいと「評価」がされる面もあり、みんなと同じ
ことをするのが難しい園児については、「特別な支援が必要な子ども
」として課題感を抱えやすいように感じました。

一方、「主体性」は、子ども自身が「そうしたい」と思ったようにしてい
られるか、という視点です。その子自身の「在り方」自体を尊重する、
その子がどうしたいか？ということを受け止めるということでもありま
す。

例えば、対話の場で話さない子どもがいても、まずは「話さない」と
いうその子の「ありよう」を認めます。「話すことがよくて、話さないこ
とが悪い」という「評価」はそこには入りません。話したかったら話せ
ばいいし、話したくなければ話さなくてもいい。まずは「話さない」と
いう、そのままの「ありよう」を受け止めることが、「主体性の尊重」だ
と言えます。

そして、そのうえで、「この子は何を考えているのかな」「どんな気持
ちがあるのかな」と子どもの思いをともにしようとし、「問いを変えたら
何か思いがあらわせるかな」と、保育者が子どもとともに考えてい
く。それが「子ども主体の保育」なのではないでしょうか。

また、もう一つ、「子ども主体」と「協同性」の両立に悩みを抱える園の姿も見えてきました。

「子ども主体」に試行錯誤中の園は、「子ども主体であろう」と試みながらも、「協同性」との両立に悩んでいることが示唆される結果が出てきたように思います。子ども一人ひとりの興味関心を大切にしたい一方で、子どもたちの「協同性」を育むためには「一斉活動」をやめられない。そんなジレンマがあるのではないかと感じています。

「協同性」は、何か一つのことを成し遂げるために、協力して助け合うことです。しかし、その過程で、全員が「同じ」であることが求められると、苦しくなる子どもも、大人もいます。

「子ども主体」という観点から考えると、これからは、「みんなが同じ」であることを求めなくてもよいのだと思います。それぞれの考え方や方法の違いを認め合い、共有し合うプロセスを通して、共に目標に向かっていく活動こそが必要なのではないでしょうか。

この活動の在り方は「協同性」ではなく「協働性」という言葉の方がふさわしいかもしれません。「協働性」とは、コラボレーション。それぞれが自分らしくありながら、子どもも大人もそれぞれの「よさ」を活かし合って新しいことを生み出していくことです。

そう考えると、「ともにテーマ性をもって取り組み、一つのことを成し遂げる」という活動は、子どもたちの「主体性」と相反するものではなくります。

一人ひとりが主体的に活動する中で、他の子どもたちとの体験の共有や協力を経て、協働性の高い活動に発展をしていくからです。

このように活動が発展するには、子ども自身が活動を継続しながら、他の子どもたちとの共有や協力の機会を持っていくことが不可欠です。さらにはその共有や協力の機会を家庭や地域にまで広げてみれば、子どもたちの活動の幅の広がりや深まりにつながり、より豊かな学びの機会になっていくはずです。

そのためには、保育者が子どもの姿、子どもの思いをしっかりと「記録」し、その記録を元に保育者同士が「対話」を重ね互いのアイディアも出し合いながら、子どもたちそれぞれの声を活かした柔軟な「計画」を立てていくことが必要です。

このプロセスには保育者自身の「主体性」が入っていることにも注目してみてください。保育者が「～しなければならない」という思いにとらわれてしまうと、子どもたちにも「～をさせよう」という気持ちが生まれてしまいます。

「計画通りに進めなくてはいけない」という保育者のこだわりを手放し、子どもの姿をもとにワクワクしながら主体的に・柔軟に保育を行うことに、ぜひチャレンジしていただきたいと思います。

記録・対話・計画の重要性と それを支えるツールとしてのICT



玉川大学 教育学部 教授
岩田恵子先生

子どもたちの「主体性」と「協働性」が生きる活動のためには、子どもの姿・子どもの感じる世界を捉えた記録と、その記録を元に子どもの姿を語り合う対話、そしてその子どもの姿を元に子どもと共に考えていく計画の3点が必要だと考えられます。

「記録」という面では、今回の調査からも、「ドキュメンテーション」に取り組んでいる園・取り組もうとしている園が非常に多いことが見えてきました。

活動の様子を写真とコメントで記録するこの「ドキュメンテーション」は、写真の持つ豊かな表現性もあり、子どもの感じていること・考えていること、子どもの興味関心を捉えるのに、とても有効なツールです。

しかし、一方で「保護者への活動報告」としての活用にとどまってしまう、本来の子どもの思いを「記録」し、保育を考えていく方向での活用を十分にできていない園が多いこともわかりました。

その背景としては、ドキュメンテーションを実施している園のうちの2/3以上が、「毎日」ではなく、「週に数回」「月に数回」という頻度での活用にとどまっていることもあるかもしれません。

保育者の業務負担感という課題感がある中で、まずは回数が少なくとも実施をしてみようという配慮があるのではないかと思います。結果として、掲示物や園だよりなど、活用方法も限定的になっているという事実が見えてきました。

しかし実は逆に、ドキュメンテーションを毎日実施している園ほど、ドキュメンテーションに対する業務負荷という課題感が少ないということも、今回の調査からわかりました。

また、ドキュメンテーションを毎日実施している園は、掲示物や園だよりだけではなく、クラス日誌や園児日誌、連絡帳などの他の書類としても活用しており、「業務の追加」ではなく「業務の置き換え」ができています。ドキュメンテーションを活用して、保育者同士の対話や、保育の振り返り、保育計画の立案をしている園も多く、記録を上手に活用することが対話や計画にもつながることがわかります。

なお、このような「業務の置き換え」については、ICTを活用することで、より効率的に進めることができます。

保育者の養成校等でもICTの活用等を学ぶ学生が増えており、ICTの導入は今後不可欠ともいえると思います。

ICTをうまく活用しながら、記録の在り方や書類の見直しなどを行って業務を削減し、その時間を“子どものこと”を考えたり、対話したりする時間に充てることができれば、より豊かな保育につながられるのではないのでしょうか。

「子ども主体」の保育による 持続可能な園運営



玉川大学 教育学部 教授
大豆生田啓友先生

2023年4月「こども家庭庁」との創設と共に、こども基本法が施行され、「こどもまんなか社会」として子どもの人権を尊重し、「権利主体」としての子どもの声を聴くことの必要性・重要性が定義されました。

これはつまり、園種の違いに関係なく、保育・幼児教育として一貫して「子ども主体」が求められる時代になったということです。

また、今回の調査では、園運営の観点でも「子ども主体」でない園は職員の離職という問題も抱えやすく、職員体制が整わないという傾向がみられました。それは安全リスクが高い状態に陥りやすいということを意味します。

保護者のニーズとしても「子ども一人一人の個性や自主性を尊重してほしい」という声が高いこともアンケート結果から示されました。

さらに保育の養成校でも、学生たちは「子ども主体」の保育について学び、「子ども主体の保育」を実現できる園に就職したいと考えてようになってきています。そのため、「子ども主体」ではない園は、採用に課題を抱えることが多いように思います。

保育の質の向上はもちろんのこと、多くの園が課題と考えている「園児確保」の観点からも、また、働き手の観点からも「子どもの姿をとらえた、子ども主体の保育」を行っていくことこそが持続可能な園運営を実現してくれるのではないのでしょうか。

それぞれの園の文化や理念、地域との関係性など、過去から積み上げてきたものはとても大切なものだと思います。また、それと同時に、これから「子ども主体」を志向していくためには、他園の取り組みに目を向けてみることで、新しい視点や発見をし、それを自園の保育に取り入れていくことも、とても大切なことだと思います。

園種や運営母体の種別を超え、多様な園の事例から学んでいくことを通して、自分たちの地域・園にあった「子ども主体」の在り方を考えていくことに、ぜひチャレンジしていただきたいと思います。